

8

多文化視点ピラミッドを活用して原則10を促進すること



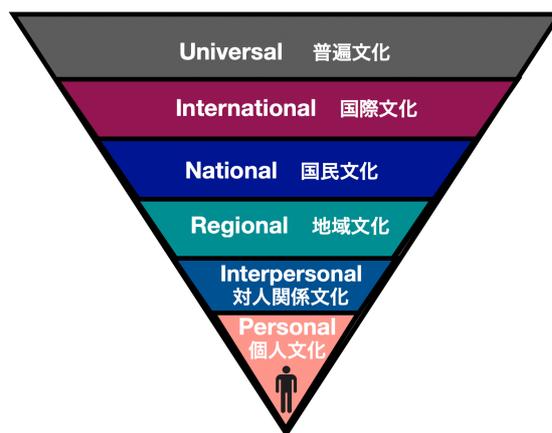
原則10： 異文化間の対話や相互理解を促進し、不寛容を取り除く

“I contain multitudes.” 「私の中にはいろんな面がいっぱいあるんだ。」ウォルト・ホイットマンはそう書いた。ボブ・ディランはそう唄った。それから我々も、自分のことについてだけではなく、他人のことを考える時でもこの言葉が頭の中に響き続けたら良い。

全世界の人々はある意味で家族だと言えるが、お互いに対する不寛容が出し抜けに生まれることも少なくはない。多種多様な人々と出会ったり、目新しい経験を積んだりしていくにつれて、誰しものが先入観が消えてより心を開いた人間になれるだろうと思うが、そういった日常がなかなか難しい環境においては、まず自分自身の中の多様性を発見し、我々人類の絶え間なく変わる本質に気付く明確な方法が偏見に対する武器となる。たとえ数人の文化を全体的に分析してみても、世界中の人々との共通点がいくつか見つかり、独自の特徴も現れ、結局この様な結果に辿り着く：我々は同じことをやっているが、やり方だけが異なるのだ。その上、人間とえば、風が変わるだけで態度も大きく変わり得るように矛盾だらけの者だし、価値観や信念をはじめ、存在感やアイデンティティでさえ常に変化していく。自分を含めて誰にでも色々な面が沢山あるのだと自分に言い聞かせて交流すること。



この右のイメージは、Pyramid of Cultural Perspective (PCP: 多文化視点ピラミッド) という、上記の「本質に気付く明確な方法」に関する略図である。本学では、各個人がどれだけ多文化から構成されるかを教えるためには勿論、さらに様々な文化に関わるディスカッションや課題、思考実験等においても、貴重で思い出しやすい視覚教材である。私の経験に照らし合わせてみると、教室では文化に関する意見交換をする場合（特に比較文化か国際問題についての話し合い）、学生はある文化をただ一つだけの視点から考える状態に陥ってしまう傾向がある。例えば、ある人々を一つの集団として考えても、個人個人として考えても国民文化視点からしか見えなくなり、学生が持つその国の大雑把な文化イメージを例の人々のあらゆる面に当てはめてしまう。



もちろん、この様に「外」の人間を狭い視点からしか見ないというのは学生に限られた事ではなく、年齢や社会経験を問わず、日々の喧騒により何においても様々な角度から考察してはいけないため、よく知っている「内」の人間に比べて「外」の人や文化を単純にカテゴリー化してしまう傾向にある。だからこそ本学では、多文化視点ピラミッドを授業などで参考にすればするほど、日常生活でも無意識のうちに、自然に多様な視点からより寛大に同胞と付き合える事を私は望んでいる。ピラミッドの頂点にある普遍文化視点から考えると、どの文化でも「家族」という概念、通過儀礼や音楽等という共通点が多く見つかり、そして各段階を降りていくとともに少しずつ共通点よりも特徴や相違点が表れ、より各文化・各個人の関係の全体像を把握でき、何よりも遠い「外」と身近な「外」に対する不寛容と無知が少しでも多く、寛大と好奇心に置き換えられるだろう。

